

「コロツケにケチャップ」

群馬県 伊勢崎市立宮郷中学校 三年  
羽鳥 恵太

僕たちが暮らす伊勢崎市には、県内で最も多くの外国人が生活しています。国籍も六〇か国以上と様々で、今や国際都市と言っても過言ではありません。外国語の看板を掲げたお店が年々増え、町のいたるところで外国語を耳にすることが日常になっています。僕がよく利用するコンビニエンスストアにも、外国人の店員さんがたくさん働いています。みんな日本語がとても上手で、明るく丁寧な接客をしてくれます。

ある日、いつものように買い物に行くと、「いらっしやいましたあ。」という、元気なあいさつが聞こえました。僕はおかしくなって思わず声の方を見ると、初めて見る外国人の店員さんでした。日本に来て間もないようで、店長さんに教わりながらレジをしていました。僕は、その店員さんにコロツケを注文して、家に帰って袋から出してみると、ソースの代わりにケチャップが入っていました。「まだ慣れてないから間違えてしまったのか」と思いましたが、捨ててしまうのはもったいないので、試しにコロツケに付けて食べてみました。最初の一口は違和感しかありませんでした。「やっぱりコロツケにはソースだな」と思いましたが、二口、三口と食べてみると、段々おいしくなり、「ケチャップもありだな」と感じてきました。調べてみると、スリランカやインドなど南アジア地方を中心に、揚げ物にケチャップを付けて食べる国があることが分かりました。

このことがあつてから、最近よく耳にする「多文化共生」について考えてみました。伊勢崎市では、二十年前くらいから外国人が急に増えたそうです。それに伴って、騒音やゴミの出し方などが問題になっていきます。日本人の中には、日本に来たなら日本に合わせるのが当たり前だと言って、外国人を毛嫌いする人もいます。しかし僕は、遠い国から来て、日本のことが分からないのだから仕方ないと思います。

日本には「以心伝心」や、「郷に入つては郷に従え」という言葉があります。これは他の民族に比べると、言葉による教え合いよりも、相手の気持ちやその場の状況を推し量ることを重んじる閉鎖的な日本の文化を象徴していると思います。このような考え方は、積極的で自分の意見をきちんと言いつつ外国人からすると、壁を作られているように感じるのではないのでしょうか。これからの日本人は、習慣や考え方を言葉にして伝える「有言伝心」をしていかなければいけないと思います。たくさん話してお互いを理解できれば、「従え」なんて言わなくても、自然に仲良く暮らすことができると思います。

今後、ますます日本で暮らす外国人が増えると言われていきます。今までは出会わなかった場所や場面でも、日常的に外国人と接することになるでしょう。日本人では考えられない行動をする人もいるかもしれません。しかし、彼らは僕たちとは生活習慣や文化が違う人たちです。僕たちとは違って当たり前なのです。

僕は、「多文化共生」するには、コロツケにケチャップを付けて食べてみるように、最初から拒絶しないで、柔らかい心をもって相手を受け入れることが大切だと思いました。心の垣根を取り払って交流すれば、きつと分かり合えるはずです。最初はにこっと笑ってあいさつをすることしかできないかもしれませんが、間違えても通じなくても、積極的にコミュニケーションを続ければ、気持ちに通じると思います。そのために、僕はいろいろな国の言葉で、「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」のあいさつが言えるようになりたいと思っています。そして、今度あの店員さんに会ったら、彼の国の言葉であいさつをして「コロツケにケチャップ」おいしかったと話しかけてみようと思っています。それが僕の「多文化共生」のはじめの一歩です。

僕の取り組みはほんの小さなことですが、みんなが同じ気持ちを持って、日本で暮らすすべての外国人が、母国にいるように安心して生活できるようになると 생각합니다。そうだったときに、本当の「多文化共生社会」と言えるのではないのでしょうか。